様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｈ０４４４７

研究課題名（和文）生涯を通じた男性のケアの担い手としての発達支援方法の開発

研究課題名（英文）The developmental support to the men as a caregiver through their life

研究代表者
吉沢　豊予子（Yoshizawa, Toyoko）

東北大学・医学系研究科・教授

研究者番号：８０２８１２５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,400,000円

研究成果の概要（和文）：男性は親準備期、育児期、介護期の生涯を通じてケアの担い手としての意味とケア力はどのように発達していくのか明らかにした。青年期男性は被養育経験、成人愛着スタイルは親準備状態に影響していた。育児期の父親は、休日の育児時間が多く、
コミュニケーションとなるかかわり方をすると子どもとの相互交流を高めていた。介護期では新旧両方の男性性があると介護力が高いことが示された。また本研究においてケアリングマスキュリニティという新しい男性生が、男性のケア力に関連していることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は男性の育児参加、介護参加が急速に進められている中で、男性がケアの担い手となるためにケアリングマスキュリニティという男性性が関連あることを示し、世界で初めて、ケアリングマスキュリニティを測定するツールを開発した。今後このツールを使いながら、男性のケア力のアセスメントおよび評価に使用できる。男性のケアリングマスキュリニティを高めることは、女性、子ども、そして、男性本人にもよい影響となることを確信する。

研究成果の概要（英文）：We clarified how the meaning and caring of a man as a caretaker develops throughout his life. This result showed the following. In adolescent men, parental care experience and adult attachment style affected parental readiness. Fathers in the child-rearing period have a lot of time to raise children on holidays, and nonverbal communication enhances mutual interaction with their children. It was shown that the long-term care ability is high, when men are both old and new masculinity during the long-term care period. In this study, we also found that a new masculine called Caring Masculinity is related to the caring ability of men.

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：生涯発達看護学　男性性　ケアリングマスキュリニティ　ケア力

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2007 年、仕事と生活の調和（Work Life Balance: WLB）憲章と行動指針が策定された。WLB とは国民の一人ひとりがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすとともに家庭や地域生活などにおいても子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できる社会（WLB 憲章 2007）としている。しかしながら WLB は、女性活躍のために育児支援としての女性の働き方支援、男性の育児休業取得やイクメン、イクボス宣言など育児期と関連付けた取り組みが行われてきた。一方で超高齢化社会となった日本では、在宅介護が中心となりつつあり、介護者支援の枠組みに中年期以降の男性が入らざる得ない状況となり、妻や嫁による家族介護モデルに限界がきており(2015 斎藤)、男性介護者の増加がさらに見込まれる。つまり今後、育児期にある男性・女性の育児と仕事、介護期にある男性・女性の介護と仕事と WLB を積極的に考える時代に突入したと言えよう。

【ケアの担い手としての男性の意味】：これまでは「男性は仕事・女性は家庭」という古典的性別役割が家庭生活に根強くあり、男性はケア責任を持たなくてもよい存在であった。しかし前述のように女性の活躍推進に伴う共働き世帯の増加や政府による男性の家庭生活の参画推進といった社会の変革により、育児、介護というケアの専属役割を女性から解かざるを得ない状況にあり、育児、介護に男性の参入が免れなくなっている。これまで育児・介護というケアの担い手から回避してきた男性たちは今、非常に生きづらさと困惑を抱えている（家事ハラ、パタハラ、介護離職 etc）。男性育児研究は数多く、その内容は育児時間、家事時間など、ハード面に関する研究が多く、育児休業の取得率も毎年報告されている(厚労省)。また、企業において WLB の優良企業としてのクルミン、プラチナクルミンマークを得ることを企業のイメージ戦略としている。2015 年現在 2557 社が取得しているが、日本の総企業数のわずか 0.07%に過ぎず、クルミンマーク申請の条件となっている育児休業は期間に限定はなく、1 日でもよいのが現状である

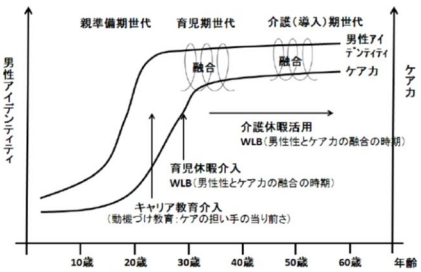

図　男性の生涯発達を通じたケアカの構造図　（WLB：ワークライフバランス）

一方、男性にとってのケアの担い手の意味を問う研究として、男性に割付けた育児休業（クオーター制）を導入したノルウエーにおける研究がある。Kvande（2015）らは、既にノルウエーで導入されている父親のクオーター制育児休業をフレキシブルに取れる方法とした場合、父親は第二のケアの担い手にしかならないことを明らかにしている。このことから、育児休業は取得することのみでなく、その中身がどのようであるかが、育児休業取得の成功か失敗かが問われていると言えよう。特に Brandth(2016)の研究は男性性とケアリング、ファザリングの融合が、子どもと良好な関係を見出すものであることを明らかにしており、女性のケアモデルの様相とは異なる男性ならでのケアの担い手のありようを示すことで、「男性の稼ぎ主モデル」に一石を投じている。

２．研究の目的

そこで、本研究では男性の世代ごとに焦点を当て、我が国における男性が各ライフステージで考える、ケアの担い手としての男性の意味および、ケア力はどのように発達していくのか、このケア力をつけるには各期どのような支援を必要とするのか、さらに生涯を通じて、ケアの担い手になることの「あたりまえさ」をどのように確立していくのかを示すこと、男性アイデンティティとケアリングの融合が新しい男性性であるケアリングマスキュリニティとなるのか、この多々しい男性性が、男性のケア力とどのように関連あるかを検討する必要がある。

３．研究の方法

生涯を通じてのライフサイクル別に調査を実施していく。

(1)親準備期におけるケア力の実態を明らかにする。

20-24 歳の大学生・大学院生 200 名にオンラインによる無記名自記式質問紙を実施した。調査内容は、基本的属性（年齢、家族構成、子どもやペットの世話経験、父母との同居年数、主な教育者）および被養育経験 PBI（Personal Bonding Instrument）日本語版養護項目 12 項目、過保護項目 13 項目、愛着スタイルは、ECR-GO（Experimental in Close Relationships inventory the generalized other version）見捨てられ不安 18 項目、親密性の回避 12 項目、親準備状態として JIFP（日本版 IFEEL Picture）によって調査した。統計的処理にて結果を導いた。（倫理審査東北大学大学院倫理委員会 No.2017-1-113）。

(2)育児期における父親の育児力の調査

①育児における仕事役割と家庭役割双方が父親の情緒応答性に与える影響についての実態

第１子が 1 歳未満の乳児をもつ父親 200 名に対し、育児力とそれに与える影響要因をオンラインによる調査を行った。調査項目 JIFP、育児参加状況（休日、平日の育児時間、育児内容（世話項目５項目、コミュニケーション項目 4 項目）、父親の就労状況（職業ストレス日本語版 Job Content Questionnaire(JCQ)短縮版、属性として年齢、学歴などの人口統計学変数、父親の就労

時間、職種、母親の就労の有無、父親育児休暇の有無、子どもの性別であった。二項ロジスティック等統計処理により結果を導いた。（倫理審査東北大学大学院倫理委員会 No.2016-1-611）。

②子育て中の共働き夫婦のコペアレンティングとその関連因子に関する研究

2 歳から３歳未満の第一子を養育中の共働き夫婦（ペアではない）父親 300 名、母親 300 名に対し、コペアレンティングに影響する要因をオンライン調査した。日本語版コペアレンティング関係尺度（CRS-J）、合意４項目、親密性５項目、もめごと５項目、サポート６項目、阻害６項目、育児承認７項目、家事分担２項目計 35 項目の５件法、一般他者版成人愛着スタイル尺度（日本語版 ECR-GO）見捨てられ不安 18 項目、親密性の回避 12 項目、夫婦関係調整テスト 15 項目、精神的健康について日本語版 Center for Epidemiology Studies Depression Scale: CES-D20 項目 4 件法、育児参加状況、11 項目、育児セルフエフィカシー尺度、家族する尺度、現実の実践と理想をそれぞれ 8 項目を５件法で評価する。属性項目（年齢、性別、職種状況、年収、育児休業の有無など 18 項目）を統計学的処理にて結果を導いた。（倫理審査東北大学大学院倫理委員会 No.2018-1-304）。

(3)育児休業制度を活用した父親の体験の明確化についてーの研究

男性への育児休暇を積極的に推進している企業の 3 歳までの子どもをもつ男性職員で、2 週間以上の育児休業を取得した父親に半構造面接をオンラインにて実施し、質的帰納的内容分析を実施した。（倫理審査東北大学大学院倫理委員会 No.2020-1-355）。

40 歳～60 歳の就労し、親（実父母、義父母）の介護をしている男性 400 名に対し、オンライン調査を行った。新しい男性役割尺度、女性への気遣い 4 項目、家庭への参加 4 項目、他者への配慮 4 項目、強さから解放 4 項目の計 16 項目の 7 件法、伝統的な男性役割態度尺度。社会的地位の高さ 4 項目、精神的・肉体的な強さ 4 項目、作動性の高さ 4 項目、女性的言動の回避 4 項目、女性への優位性 4 項目計 20 項目の 7 件法、介護ケア力、健康を維持する力 10 項目、健康問題に対処する力 6 項目、介護する力 9 項目、社会的資源を活用する力５項目、家庭を運営する力 12 項目、コミュニケーション力 5 項目、環境を整える力 5 項目、経済力 4 項目、家庭内での役割分担を補う力 4 項目の計 60 項目の 2 件法および属性項目（年齢、既婚の有無、子ども数、被介護者の介護度、介護休暇の有無、介護休暇の取りやすさの有無、育児経験の有無を統計学的処理にて結果を導き出した。（倫理審査東北大学大学院倫理委員会 No.2019-1-195）。

(4)ケアリングマスキュリニティ尺度の開発

20 歳から 60 歳未満の男性 450 名を対象にして、ケアリングマスキュリニティ尺度の信頼性と妥当性の検討を行った。Elliott（2016）のケアリングマスキュリニティの「支配とそれに関連づけられた特性の拒否」「肯定的感情」「相互依存」「関係性」の 4 つの概念のもとに質問紙を作成の因子構造として、探索的因子分析、妥当性として、構成概念妥当性（収束妥当性、弁別妥当性）、確証的因子分析、信頼性クロンバックのα係数、再テスト法）を実施した。（倫理審査東北大学大学院倫理委員会 No.2020-1-553）。

４．研究成果

(1)青年期男性の被養育体験および成人愛着スタイルが情緒応答性にどのように影響するか？

PBI と JIFP との関係においては、母親からの養護性の高い群は、低い群に比べて有意に JIFP のカテゴリー使用範囲が広い(p=0.02)。つまり情緒の読み取りがよいと言える。父親からの養護性の高い群は快不快の評定で快の評定が高い傾向があった(p<0.1)。また、母親、父親やの過保護性の高低と情緒の読み取りには関連がないことが明らかになった。具体的な情緒の読み取りでは、悲哀の読み取りは、養護性が低い場合有意に読み取りの頻度が多かった(p=0.037)。また、過保護性が高い場合同様に悲哀の情緒を読み取り頻度が有意に高かった(0.006)。

ECR-GO と JIFP との関係において、ECR-GO の回避の高低において快不快尺度の快評定は、回避が低い群は、高い群に比べて有意に高い(P=0.003)。不安尺度の高低では関連がなかった。具体的な情緒の読み取りについてでは、喜びは、不安の高い群が低い群より有意に読み取り頻度が高かった(p=0.002)。対象希求（表情の読み取りが難しい）の読み取り頻度は、不安の低い群が高い群に比べて有意に高かった(p=0.037)。疲労、恐怖の読み取りは、回避の高い群が低い群に比べ読み取り使用頻度が有意に高く(P=0.021,p=0.007)。対象気球においては、回避の低い群が高い群に比べて読み取りの使用頻度が有意に高い傾向があった(p＜0.1)。

表 6. PBI 養護尺度と育児準備状態

	全体	養護尺度											
		PBI 母:n=198						PBI 父:n=174					
		養護高		養護低				養護高		養護低			
	n=200	n=108	(SD)	n=90	(SD)	t 値	P 値	n=80	(SD)	n=94	(SD)	t 値	P 値
一致数	17.93	18.08	0.35	17.76	0.38	0.64	0.523	18.41	0.38	17.89	0.35	1.01	0.312
快不快評定合計	87.20	87.32	0.95	86.97	1.05	0.25	0.801	88.34	1.07	85.62	0.99	1.86	0.065
カテゴリー使用範囲	8.97	9.28	0.19	8.62	0.21	2.34	0.020*	9.15	0.22	9.10	0.20	0.18	0.856

*; P<0.05

表 7. PBI 過保護尺度と育児準備状態

	全体	過保護尺度											
		PBI 母:n=198						PBI 父:n=174					
		過保護高		過保護低				過保護高		過保護低			
	n=200	n=79	(SD)	n=119	(SD)	t 値	P 値	n=80	(SD)	n=94	(SD)	t 値	P 値
一致数	17.93	18.33	0.40	17.67	0.33	1.26	0.208	18.30	0.43	18.04	0.32	0.47	0.640
快不快評定合計	87.20	86.57	1.11	87.55	0.91	-0.68	0.494	88.33	1.24	86.08	0.91	1.47	0.144
カテゴリー使用範囲	8.97	8.73	0.22	9.14	0.18	-1.42	0.156	8.97	0.25	9.20	0.18	-0.76	0.449

*; P<0.05

表 10. ECR-GO とカテゴリー使用幅度

	全体	ECR-GO:n=200											
		不安尺度						回避尺度					
		不安高		不安低				回避高		回避低			
		n=105	(SD)	n=95	(SD)	t 値	P 値	n=100	(SD)	n=100	(SD)	t 値	P 値
喜び（カテゴリー1）使用幅度	5.88	6.33	0.21	5.38	0.22	3.10	0.002**	5.84	0.22	5.91	0.22	-0.22	0.823
疲労（カテゴリー3）使用幅度	1.42	1.24	0.17	1.61	0.18	-1.50	0.134	1.70	0.17	1.13	0.17	2.32	0.021*
恐怖（カテゴリー11）使用幅度	0.34	0.26	0.07	0.43	0.08	-1.67	0.096	0.48	0.07	0.20	0.06	2.72	0.007**
対象希求（カテゴリー13）使用幅度	0.30	0.18	0.08	0.42	0.08	-2.10	0.037**	0.20	0.08	0.39	0.08	-1.66	0.099

*; P<0.05　**; P<0.01

被養護体験において、母親から高い養護性を経験した場合は、情緒応答性は高くなっていた。父親から高い養護性を経験した場合も、快不快評価で高くなっていた。また、成人愛着スタイルにおいて回避が低い群が難しい情緒の読み取りができていたことから、親からどのような育てられ方をしたか、成長の過程で、成人型愛着スタイルを発達させたが、次の世代の養育力に影響を与えて

いることが示唆された。

(2)育児世代のケア力についての研究成果

①育児における仕事役割と家庭役割双方が父親の情緒応答性に与える影響の実態について、二つの研究を行った。一つ目が JIFP を用いた乳児の持つ父親の情緒応答性の特徴である。190 名の対象者の JIFP30 枚の写真の読み取り 5700 枚について、情緒の読み取りが言語化できた（写真の表情を一単語で述べることができる）、情緒の読み取りができなかった（こどもの情緒の読み取りとは異なる表現または無回答）に分けた。言語化できた割合 4708 枚 82.6%、子どもの視点で情緒が読み取れない 992 枚 17.4%であった。各父親で、情緒が言語化できない割合が 20%未満のものを情緒の読み取りができる群、20%以上のものを情緒の読み取りができない群に分け評価した。属性では、就労時間が週 60 時間以上のものに情緒の読み取り能力が低いものが多かった。また、妻が有職で既に就労しているものに情緒の読み取りが低いものが多かった。

表情を 18 カテゴリーに分類し、18 番目がその他というカテゴリーであるが、子どもの 30 枚の写真を見たときの一単語による言語化が 17 番目までに属さない、子どもの表情の言語化ではない、あるいは、言語ができないものとしているが、30 枚の写真の中で、18 番のカテゴリーを多く使用する父親が多い写真は、No.3(33.7%),No.9（33.7%）、No.18（30.6%）、No.15（29.5%）**注（JIFP 著作権者から写真の提示禁止**）であった。30 枚中 4 枚は父親が情緒の読み取りが難しい写真である。その中でもこれらの写真を読み取りができる父親たちがどのように読んでいるかというと「注意・疑問・驚き」というカテゴリーに属する単語で言語化していたものだった。一方、誰でもが情緒を読める写真があり、No.24「喜び」90.5%である。No.24 の写真は 9 割以上の父親が喜んでいる表情と読み取っていることになる。、また、No.25 は、90.0%の父親が、眠い表情であると読み取りをしている写真である。3 番目に多いのが、No.19 で 74.7%の父親がこどもが悲しい表情であると情緒を読み取っていた。考察：属性において就労時間が長いと情緒の読み取りがよくない結果は、先行文献の報告で、育児参加のできていない父親は残業時間が多く、通勤時間の長い父親と報告されており、育児に参加していなければ、子どもの表情を読み取ることができない、つまり育児能力は上がらないということができる。さらに誰もが読み取り易い表情は、子どもの表情分化においても早期から発達し、分化するものであることからも言える。第二の研究は、第一の研究を踏まえて行った研究で、統計的に情緒応答性に影響する因子を探索した。

表7. 情緒の読み取りにくい写真の読み取りに関連する要因

		モデル1			モデル2			モデル3		
		AOR	(95%CI)	p	AOR	(95%CI)	p	AOR	(95%CI)	p
育児行動										
世話合計	合計3項目未満	ref.								
	合計3項目以上	2.00	.531 - 7.531	.305						
コミュニケーション	合計3項目未満				ref.					
	合計3項目以上				3.96	.810 - 19.346	.089			
育児時間										
休日	25%未満							ref.		
	25-50%未満							1.65	.318 - 8.518	.552
	50-75%未満							3.13	.512 - 19.098	.217
	75%以上							1.58	.230 - 10.848	.641

モデル2-4: 多変量ロジスティック回帰分析; 職務ストレス, 職業, 就労時間, 第2子予定を含めて調整した

属性と情緒が言語化できるかできないかでは、妻が無職の父親は情緒の読み取りができていた(p=0.017)。父親が育児休暇有の場合、読み取り易い傾向にあった(p<0.1)。
情緒の読み取りは、育児においてコミュニケーションとなる育児を行っている方が読み取り易い傾向にあった。また、休日育児に時間をかけるほど情緒の読み取りがいいことも明らかになった。

②子育て中の共働き夫婦のコペアレンティングとその関連因子に関する研究においては、

この研究では、夫婦関係と愛着スタイルとコペアレンティングについて明らかにした。本研究で対象となった 2 歳児を持つ夫婦共働きの父親、母親の成人愛着型スタイルは、男性は安定型（回避・不安ともに引い）が 23.7%、とらわれ型（回避が低いが不安が高い）は 32.3%、拒絶型（回避が高い、不安低い）が 21.3%、恐れ型（回避高い、不安も高い）は 21.3%であった。母親は、安定型 27.9%、とらわれ型 27.2%、拒絶型が 22.1%、恐れ型が 22.8 であった。父親はとらわれ型の割合が一番多く、母親は安定型が一番多かった。愛着スタイルごとにコペアレンティングの関係を見てみると、父親、母親とも安定型のコペアレンティング総得点が高かった。一方父親の中で、一番割合の多かったとらわれ型が、コペアレンティング総得点が一番低い値になっていた。これについて重回帰分析を行ったところ、父親では ECR-GO 見捨てられ不安がコペアレンティング CRS-J 合計得点に負の影響をしていた。ECR-GO 見捨てられ不安×親密性の回避の交互作用項について、有意な影響を求めた。さらに最終モデルまでのR^2の変化が有意であったため、単純傾斜分析を行ったところ、ECR-GO 見捨てられ不安が高い場合は、親密性の回避が高くなるとコペアレンティングの変化量が大きかった。これらより、父親の愛着スタイルには交互作用項があり、見捨てられ不安が高いとコペアレンティングが低く、さらに回避も低いと回避が高い場合よりコペアレンティングが低くなることが分かった。父親の場合、2 次元の組み合わせによる不安と回避の組み合わせが重要になる。特に日本人の男性に多いとらわれ型は、コペアレンティングの「子どもの前のもめごと」「阻害」が他の愛着スタイル型より高い傾向があり、注意する必要がある。

③育児休業制度を活用した父親の体験の明確化についてーの研究

育児休暇が徐々に浸透してきている中、父親が育児休暇を取った場合、その期間中どのような過ごし方をしているのか、そこでどんな思いをしたかをインタビューを通じて明らかにした。5 名の父親にオンラインで面接を行った。承諾を得られる方が少なく、ケースを集めることができ

なかったため、1例毎に丁寧に分析することとした。事例A：1歳3か月の双子の父親であった。双子であり初めてであったので、妻は実家に戻り児が7か月になるまで実家に止まり、その後自宅に戻ってきた。事例Aは、それまでたまに妻の実家に子どもを見に行く程度で接触的に児と接することはなかった。妻は実家から家に戻り、一人ですべての育児、家事をすることになり、非常にストレスを感じていた。そこで、夫婦で話し合い児が8か月の時に2週間の育児休暇を夫がとり、この間全面的にAが育児も家事を行うということで取り組んだ育児休暇であった。、Aの語りの中から、3つのテーマを抽出することができた。**「育児への自信の獲得」「切り離し、引き戻された仕事への思い」「小さい時から育む父子関係」**であった。特に、仕事の関係では、会社が男性の育児休業を推進しているため、上司も含め非常に育休を取ることに協力的であったことで育児に専念できる環境をありがたく思っていた。会社に守られているという感覚を持っていたという。育休後半になると、仕事を忘れていたことに「やべーと思いました・・」というように育休にどっぷりつかっていたようです。仕事に復帰してからも、土日子どもと接するのが楽しみでと、仕事と子育ての両立ができる方向に進んでいた。**「小さい時から育む父子関係」**は自身の小さい頃の父子関係について、語り始めたことからであった。子どものころ、あまり父親と接した記憶がない、今は父とは仲が良いが小さい時はぎこちなかった。ここで育休を取って、「*今0歳から何歳という期間はその時しかなくて、育休とってでも早く仲良くなってその姿を拝んでやったほうがいいんじゃねえのという・・*」育休をとり、0歳という未知な親子関係を築けたことの自身のようなものだった。事例Bは、まさに理想の父親の育児休暇の姿というように思えるくらいのものだった。そのこともあり、**「本当のイクメン」「渦中の中のやりがい」「自分の感じた父親像を子どもにも示したい」**のテーマを導き出した。特に**「本当のイクメン」**は、イクメンという言葉だけが一人歩きしていて、本当のイクメンとは、事例Bのことと納得するくらい育児と家事に没頭していることが分かったことからの言葉であった。育児の第一養育者となり「母乳以外はすべて私がしました・・」というように言葉どおりの 1 か月であった。そのこともあり「渦中のなかのやりがい」というのが次に出てきている。「育児は大変だなっていうことは聞いていたけど、どれくらい大変なのかっていうのが、生まれたばかりの子どもを相手にしてみて、すごく感じたので、過酷だなと本当に」「*大変さはあったけど、やりがいという言葉が正しいかはわからないですけど必要な時間だったというようなことはあります・・*」。彼の妊娠から健診にすべて付き添い、出産準備教室、両親学級にすべて参加し、立会分娩を行っている。そして、生まれた直後からそばにいて、子どもと接したことで、子どもの一挙手一投足すべて見逃さず見ている自負とその反応のかわいさがあるから、大変でもやりがいを感じていいた。事例C、事例Eは、うまく育児休暇を利用していた。妻の仕事をしており、育児休業を取っていたが、その復帰や、つなぎを事例C,Eは育児休業をとり、バトンタッチをしていた。事例Eは、育児休業を妻の職場復帰に合わせ、保育園の慣らし保育期間を含めてとり、妻がスムーズに職場復帰できるようにつないでいた。ある意味慣らし保育に子どもが言っているときは、自由時間を満喫していたと語っていた。育児休業中、父親たちは子どもと密着して過ごし、深くかかわり相互交流することで、父子関係を早期から気づいていた。育児休業中は仕事を切り離し、育児にぼっとうしていた。淡々とした育児の場合でも子どもへの愛情は芽生えていた。育児の大変さや過酷さを、身をもって体験し、同時にそれをやりがいと感じていた。育児休業終了後も積極的に育児に参加することができていた。そして、良い父子関係は継代され、そうでない場合も反面教師として、子どもとの早期からの父子関係を気づきたいと意識的に育んできた。このような体験のできる育児休業促進のため、職場環境の改善がなによりも重要な課題である。

(3)介護期の就労中年男性の男性性が介護ケア力に及ぼす影響における研究本研究では、新しい男性と古典的男性のどちらかが介護ケア力に影しているのではないかということで研究に取り組んだ。その結果、男性は、両方の男性性を持ち合わせており、5つの男性性に分類することができた。新しい男性性も古典的男性性も得点の低い男性（新低古低群)、新しい男性性の得点は低いが、古い男性性の得点が高い（新低古高群)、新しい男性中程度、古典的男性も中程度の（新中古中群)、新しい男性性の得点が高く、古典的男性性の得点が低い（新高古低群)、新しい男性性も古典的男性性も高い（新高古高群）に分類できた。その結果、男性のケア力を高めているのは介護関連にかかわる属性ではなく、男性性であった。特に新しい男性性も古典的男性性も両方を高く持っていることが介護のケア力を高めることに関連していた。

介護ケア力を細かく分けて考えると、社会資源を利用する力では、新男性性の得点が高い新高古低群の得点が高い、つまり他者関係を重んじる、相互依存関係をよしとする男性性であるため人を頼ることができる男性性が影響していた。経済力はまさに派覇権的男性性の象徴であり、古典的男性性の高い新高古高群の得点が高く、男性性の影響が明らかになった。

(4)ケアリングマスキュリニティ尺度の開発

「支配とそれに関連づけられた特性の拒否」「肯定的感情」「相互依存」「関係性」の4因子からなる39項目と「ケアギバーになる」10リカートスケール1項目を加えた40項目の尺度を開発した。ケアリングマスキュリイティの高い男性がケアする力を持っていると評価することができる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Takeishi Y, Nakamura Y, Kawajiri M, Atogami F, Yoshizawa T.	４．巻 249
２．論文標題 Developing a Prenatal Couple Education Program Focusing on Coparenting for Japanese Couples: A Quasi-Experimental Study	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Tohoku J Exp Med.	６．最初と最後の頁 9-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 武石陽子，中村康香，吉沢豊予子	４．巻 73
２．論文標題 出産前教育としてのコペアレンティング促進プログラムを実施して	５．発行年 2019年
３．雑誌名 助産雑誌	６．最初と最後の頁 106-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 相馬深輝、武石陽子、中村康香、吉沢豊予子	４．巻 21
２．論文標題 共働きの父親、共働きの母親それぞれの成人愛着スタイルがコペアレンティングに与える影響	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本母性看護学会誌	６．最初と最後の頁 27‐35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 Sayuri Yasuno, Yoko Takeishi, Yasuka Nakamura, Toyoko Yoshizawa
２．発表標題 The influence of coparenting and marital relationship on parental depressive symptoms
３．学会等名 The 6th WANS（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yoko Takeishi, Yasuka Nakamura, Maiko Kawajiri, Fumi Atogami, Toyoko Yoshizawa
２．発表標題 Coparenting and marital relationship in parents who have their first child under one year old in Japan
３．学会等名 The 6th WANS（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 望月瑞希，坂村佐知，跡上富美，中村康香，吉沢豊予子
２．発表標題 青年期男性の被養育経験と愛着スタイルが育児準備状態に及ぼす影響
３．学会等名 第60回日本日本母性衛生学会総会・学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐藤愛奈，坂村佐知，望月瑞希，武石陽子，中村康香，吉沢豊予子
２．発表標題 日本語版IFEEL Pictures(JIFP)を用いた父親と男子学生の情緒応答性の違い
３．学会等名 第60回日本日本母性衛生学会総会・学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 櫻井碧，武石陽子，中村康香，吉沢豊予子
２．発表標題 共働き夫婦それぞれの成人愛着型とコペアレンティングとの 関連性
３．学会等名 第60回日本日本母性衛生学会総会・学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yoko TAKEISHI, Yasuka NAKAMURA, Maiko KAWAJIRI, Fumi ATOGAMI, Toyoko YOSHIZAWA
２．発表標題 What Does Predict Coparenting at The First Month or Third Month? Longitudinal Study from Late Pregnancy
３．学会等名 The 22nd EAFONS（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 坂村佐知，武石陽子，跡上富美，中村康香，吉沢豊予子
２．発表標題 乳児育児期父親の職務ストレスとコペアレンティング(夫婦協同育児)との関連検証
３．学会等名 第59回日本母性衛生学会学術集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mizuki MOCHIZUKI, Sachi SAKAMURA, Yasuka NAKAMURA, Fumi ATOGAMI, Toyoko YOSHIZAWA
２．発表標題 Examining Emotional Availability to Infant Expressions Among Male Adolescents Using Japanese IFEEL Pictures
３．学会等名 The 21st EAFONS（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 竹田理恵，武石陽子，寺田由紀子，吉田美香子，川尻舞衣子，中村康香，吉沢豊予子
２．発表標題 就労中年男性の持つ男性性が親の介護ケア力に及ぼす影響，
３．学会等名 第40回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 寺田 由紀子，竹田 理恵，中村 康香，武石 陽子，川尻 舞衣子，吉田 美香子，吉沢豊予子
２．発表標題 ケアリング・マスキュリニティの研究動向に関する文献検討，
３．学会等名 第40回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

http://www.womens.med.tohoku.ac.jp/index.html
http://www.womens.med.tohoku.ac.jp/research/index.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中村　康香 (NAKAMURA yasuka) (10332941)	東北大学・医学系研究科・准教授 (11301)	
研究分担者	尾崎　章子 (OZAKI akiko) (30305429)	東北大学・医学系研究科・教授 (11301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関